

京都大学	博士（文学）	氏名	田尻健太
論文題目	漢唐經學史研究		
（論文内容の要旨） 本論文の主な課題は、後漢から唐代にかけての中國の經學の様相を、後漢の鄭玄の學説の展開に焦點を當てて描寫することにある。つまり、まず鄭玄の經書注釋にはどのような特徴が見られるか、次に鄭玄の學説は魏晉南北朝時代にどのような影響を与えたのか（あるいは與えなかったのか）、そしてそうした學問の営みがどのような形で唐代の「五經正義」に到達したのか、という問いに答えることが本論文の課題となる。 そして、この課題のうち、鄭玄の經書解釋そのものについて考察したのが第一章～第三章（前半）、鄭注の受容期として魏晉南北朝時代の經學を考察したのが第三章（後半）～第六章、そして「五經正義」の考察ならびにその文獻學的研究を行ったのが第七章、これに加えて序論・結論・参考文献一覧という構成になっている。以下、各論の概要を述べる。 序論 序論では、本論文の課題と前提的な知識を整理したのち、先行研究を批判的に整理しながら、本論文の課題の所在とそれを解決するための方法論を提示した。鄭玄の經書注釋は、經學史の中でもとりわけ權威を得てきた學説であり、その研究は古くから行われてきた。こうした先行研究への批判として、過去の研究が鄭注の文章に當時の社會背景や政治的意圖を読み込みながら結論を導いており、ともすれば枠組みやストーリー先行の研究に陥りかねないことを指摘した。その上で、本論文では、鄭玄や南北朝時代の學者の學説を、できるだけ學者自身の意圖に沿って讀解することに努め、そこから經學の様相を描寫することを試みるものと位置付けた。 また、序論の末尾では、本論文の現代的意義について、二點言及した。一つ目は、本論文は、後世には權威・常識とされる學説や思考の型が徐々に權威を得ていく過程を、特に學術的な議論の蓄積の中から分析したものといえ、現代におけるアカデミアの權威への問い直しを可能にする言説になるという點である。二つ目は、本論文が、社會や政體の變化といった大きなストーリーに回収されない、個人の思考の營爲やささやかな工夫を拾い上げる研究としての方法を提示しうる研究になるという點である。 第一章 『駁五經異義』に見える鄭玄の經書解釋 第一章では、鄭玄が許慎説に反駁した著作『駁五經異義』を題材とし、鄭玄が鄭玄以前から存在していたさまざまな學説をどう整理・選擇したかを分析し、鄭玄の經書			

解釋の特徴を描寫した。本章の検討によって、本書が鄭玄が三禮注執筆前に過去の經說を整理しながら自らの考えをメモした書であり、三禮注に至る前の構築段階にある鄭說がいくつか見られることを示した。また、序論の補いとして、過去の鄭玄研究では鄭玄の政治的立場を示すものとして扱われてきた感生帝說や漢制と鄭注の關係から、必ずしもそうした文脈が読み取れないことを示した。

ここでは、鄭玄の經書解釋法として、異なる禮說を三代異物に格納することで兩立するものと解釋する方法や、異なる訓詁の說を書寫習慣の地域差として解釋する方法のほか、『周禮』を中心に据えつつ諸文獻を考慮に入れて「六宗」の内實を明かす手順などを明らかにした。

第二章 『發公羊墨守』『箴左氏膏肓』『釋穀梁廢疾』に見える鄭玄の『春秋』解釋

第二章では、『春秋公羊傳』の注釋者の何休に對して鄭玄が反論した著作『發墨守』『箴膏肓』『釋廢疾』三篇を取り上げ、鄭玄と何休の『春秋』に關する論爭を手掛かりに、鄭玄が經書解釋の際に用いるロジックを考察した。ここでは、經書には證據がない場合でも、秩序立った禮制があることを想定することで、穴埋めを交えて體系的な禮制を構築する鄭玄の思考過程を明らかにした。また、鄭玄が『春秋』解釋において「辭同事異」の方法を取ること、つまりたとえ經文の表現が同じであっても、表されている事實や意味内容は異なるとする解釋方法を用いることを指摘した。

なお、第一章・第二章で取り上げた文獻は、結論だけが簡潔に示される傾向にある經書注釋に比べると、他の學說に對する説得的な反論を示そうとしている分だけ、鄭玄の思考過程が讀者に読み取りやすい形で示されている。鄭玄の意圖や思考の方法を探る場合、この兩著が重要な位置にあることも以上の検討を通して示すことができた。

第三章 天子の宗廟・路寢・明堂を同制とする鄭玄說について

第三章では、鄭玄の宗廟・路寢・明堂についての學說を題材とし、この鄭說の特徴と、劉炫・熊安生・皇侃・賈公彥といった南北朝の學者がこの鄭說をどのように受け取り、議論を展開させたのかについて検討した。鄭玄は『周禮』を中心にこの學說を組み立てているが、その過程で他の經文と矛盾が生じた場合、經文に書かれた出來事の時期や場所を恣意的にずらすことによって、矛盾を解消するという方法を用いたことを指摘した。

そして後世の學者は、こうした鄭說の恣意性を指摘するのではなく、むしろその過程で生じた鄭說の間の新たな矛盾を、鄭玄と似た方法で解消させようと努めている。こうした學問營爲はただの辻褃合わせであるとも言えるが、むしろこの細かなロジックにおいて南北朝時代の學者の細やかな工夫とオリジナリティが見い出されるのであって、ここから南北朝時代の學說の間の繼承關係も明らかになることを指摘した。

第四章 崔靈恩の『三禮義宗』—鄭玄注から南北朝經學へ

第四章では、まとまった量の學説が伝えられ、その内容や思考を細かく分析できる學者として、南朝の崔靈恩を取り上げ、崔靈恩が鄭玄の學説を引き継ぎながら、独自の修正と整理を加える様相を考察した。鄭玄の學説は、祭祀や儀禮の位置づけや意義については體系的に説くことが多いが、その細かな手順や作法を一連のものとして提示することはあまりない。その結果、ある特定の祭祀や儀禮の經學上の意義は分かっていても、肝心のその實行方法が分からない場合が多い。これは鄭玄説の課題の一つと言える。

本章の検討を通して、崔靈恩の『三禮義宗』がこうした鄭玄説の課題に對する時代的要請から作られた書であることを明らかにした。崔靈恩は、經文と鄭注を涉獵し、誤讀されないように細かく表現を工夫しながら、一つの儀式の手順を再現することを試みた。そのための方法として、經文や鄭注の順序の入れ替えや、主語の補い、補足説明の追加などがあることを明らかにした。その際、鄭注に従うことを基調とするが、整理の際に意圖せず鄭説と異なる學説を立てている場合もあると指摘した。

第五章 『論語義疏』に見える經書解釋法—同物説と問答體

第五章では、目立って鄭説が引用されず、鄭玄の影響が明示的に表れるとは言えない『論語義疏』を題材として取り上げる。本章では、『論語』の孔子の言動を「裏に別の眞意があり、本來の孔子の（究極的な聖人としての）姿は別にある」として解釋する方法（同物説）に着目した。同物説の背景には玄學・佛教の思想があることは過去の研究で指摘されており、本章でも前半でそのことを確認した。ただ、本章ではここから一步進み、同物説が『論語』解釋の營みの中で、解釋者の想像する孔子像と『論語』の文面上の孔子の言動が異なる場合に、その矛盾を容易に解決する方法として便利に使われてきたことを指摘した。そして、この解釋手法が、特に經書解釋の實踐の場の（想定）問答から生じてきたと考えられることも指摘した。

最後に、同物説の發想と鄭玄の經書解釋法に似た要素があることを指摘した。矛盾なきものとして見る對象を「孔子の言動」ではなく「經書」とすれば、同物説と鄭玄の解釋方法はよく似ている。第三章の『鄭志』の例でも問答から鄭玄が自説の辻褃合わせを行った例がある。ここから、學者の權威を失わせかねない問いかけや批判への豫防線として、同物説や鄭玄的な經書解釋法が發展した面もあると考えられると指摘した。

第六章 劉炫の學術と書物環境

第六章では、南北朝時代の最末期に位置し、「五經正義」の内容に直接的な影響を与えた學者である劉炫を取り上げた。まず、劉炫が經書の注釋を選ぶ際の背景的な状況、たとえば國家的な圖書整理事業や、南北朝の學問的状況の差異などとの関係などを検討した上で、劉炫が選定した經書のテキストや、劉炫の北朝・南朝への學問的態度について明らかにした。

劉炫も目立って鄭説を用いる學者というわけではなく、『論語』鄭玄注を用いていたことの他には深い関係は見えない。本章の検討を通して示したように、劉炫は北朝で生まれながら南朝の書籍を入手できる立場にあり、批判対象として南朝の學問を受け取ったが、かといって北朝の學問で満足できていたわけでもなかった。こうした背景を持つ劉炫にとって、前代から受け継がれてきた鄭玄の學説も必ずしも重きを置く対象ではなかったと考えられる。

第七章 「五經正義」所引「定本」再考

第七章では、過去の研究で取り上げられてきた「五經正義」に引かれる「定本」の校勘記録を題材として取り上げ、「五經正義」の編纂について議論した。本章の内容は、本論文において「五經正義」から南北朝時代の佚書の佚文を見い出して利用することが多いことを踏まえ、「五經正義」についての文獻學的研究を示しておきたいという考えから記されたものでもある。

本章の直接の結論は「定本」の特定は困難というものであるが、その過程で「五經正義」編纂に関わる問題を多岐に亘って議論することができた。ここで示唆されたことの中で最も重要なのは、「五經正義」の編纂が、それほど厳密で統一的な作業を経たものではないということである。たとえば、「五經正義」のうち『尚書正義』『毛詩正義』『左傳正義』は劉炫・劉焯の義疏を踏襲したものとされるが、具体的にどこが劉炫・劉焯説なのかについて統一的な見解を立てることは不可能である。

よって、今後の「五經正義」研究においては、全體的な編纂方法や方針について議論してもあまり實りは無いと考えられる。しかし、こうした方向ではなく、細かな經説の論理展開を詳しく分析することを積み重ねると、大量の似た學説の中に微妙な相違が見えてくる。その相違こそ、「五經正義」が編纂物であり、過去の學説の集積から成立したことの證據であるが、これに着目することで、南北朝時代の學者の學問の系統を把握し、その學問を具体的に明らかにすることに繋がる。これは本論文の第三章～第四章の内容と重なるところである。

結論

本論文の結論は以下である。まず鄭玄の經書解釋の主要な意圖は、『周禮』を中心とした上で、『周禮』と矛盾する經文の記述を読み替えて兩立するものとして解釋し、できるだけ多くの經義に位置づけを與えることにある。ただ、鄭玄は『周禮』と無関係な場合でも、できるだけ多様な經説を否定せずに読み解けるように工夫を拂っているから、鄭玄の思考の型や手癖というべきものはこちらに認めるべきであろう。この際に鄭玄が用いる具体的な手法は第一章～第三章で指摘した通りである。

次に、ではなぜ鄭玄は『周禮』を中心に据えたのかという問いが生じる。これについては、過去の研究で指摘されてきた鄭玄の周公への禮贊という側面も大きいだろうが、今述べた鄭玄の手法や意圖の延長線上から理解することもできる。つまり、鄭玄

にとって重大だったのは、『周禮』という書物が天官・地官・春官・夏官・秋官・冬官（考工記）に分かれた整然とした官僚機構を示し、ここに他の經書の記述を紐づけることで自説の「體系性」が擔保されるとみなせることにあったと考えられる。禮の原理は秩序と等級分けにあるが、その原理を一書の構成として體現しているとみなせる經書は『周禮』しかない。

そして、鄭玄の注釋・學說だけではなく、鄭玄的な經書解釋の方法までもが後の時代の經學者に引き繼がれたことが本論文の検討から明らかにされた。鄭玄の場合は、經書間の矛盾を解決するために先述したような方法を用いていたのだが、鄭玄以後になると、鄭玄の解釋手法が、鄭說自體の矛盾を解消するためにも應用された。たとえば、第三章で見たように、『毛詩正義』『尚書正義』『左傳正義』などの中で、熊安生・賈公彦・劉芳・劉炫・劉焯・皇侃といった南北朝時代の學者たちは、鄭玄と似た手法を用いて三者同制說における鄭說の矛盾を彌縫してきた。

つまり、鄭玄の經書解釋法は、經說の矛盾を解消するための考え方の道具を數多く提供したものだが、これが鄭說自體の矛盾を解消するための解釋法としても有用であったと言える。結果的に、鄭玄は、經說の矛盾を疏通させる方法を提示することによって、自説の矛盾をも解消させる方法を作り上げたと言える。

むろん、この時代の經學者たちは鄭玄という軸だけでとらえきれものでもない。當時の學說を細かく見ると、それぞれの學者なりの問題意識やオリジナリティも垣間見えるのであって、ただ鄭說に従った學者という評價は適切ではない。崔靈恩のように鄭說の不足を補う試みをした學者もいるし、劉炫のように鄭說との關係性が強く表れてこない學者もいる。

最後に、鄭玄の經書解釋の經學史上における位置についても議論した。鄭玄的な經書解釋の手法は、本來は時代をまたいで成立した矛盾だらけの書物である經書に對し、禮秩序を中心に据え、（本來は存在しない）體系を見い出していく営みであったと言える。その際に鄭玄が用いた方法は、亂暴に言えば、「經文の中に現れる同じ言葉を必ずしも同じ意味で解釋しなくてもよい」「個々の經文の文脈を想定することで、矛盾を特例として處理してもよい」といったものである。この方法が實踐されることで、經文に即した注釋という形式によって、自らの構想を表現することができるようになり、注釋によって思想を表現するという中國における經學・注釋學の在り方が確立したと言える。

さらに、鄭玄の場合は、鄭說の中に潜む矛盾を解消する方法すら鄭玄によって提示され、ある種の反證可能性を包攝する仕組みを持つことも指摘できる。鄭玄は經書間の矛盾を彌縫する解釋法を提示したが、これは自らの學說の矛盾もこの解釋法で解消できるというメッセージにもなっている。この解釋法を用いれば、それまでの經學の中で生じていた矛盾を次々と解決することができ、その學說はより緊密になってい

く。

ただ、辻褃合わせであるからといって、當時の學説に何の意味もないというわけではなく、そこにこそ當時の經學者たちの工夫や實力を見い出すことができる。また、そこには、學者としての權威を守りたい經學者たちの生々しい格闘の痕跡を窺うこともできる。

最終的には、こうした學問營爲が官製の「五經正義」に取り込まれ、政治的な權威をもつことになった。「五經正義」の中に潜む矛盾もまた、鄭玄的な方法によって矛盾を自己解決する可能性を秘めており、緊密・堅牢な學説として權威を持ちやすい性質を持っていたと指摘できる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、漢から唐に至る経学の歴史について、後漢の大儒鄭玄を軸に新たな像を描こうとする意欲作である。鄭玄の持つ意義についてはすでにさまざまな先行研究が存在するが、論者はそれを鄭玄の学説の内容ではなく、鄭玄の注釈の手法の特徴に注目し、それによって新しい形での経学史を記述しているところが、本論文の大きな特徴である。以下、章を追って議論の内容と特徴を示す。

第一章では、鄭玄の注釈の性格を考察する手始めとして、『駁五經異義』に注目する。そこでは、同書を、鄭玄の「三礼注」執筆の前段階のもので、鄭玄が経説を深めていく過程を記述したものとして位置づけ、鄭玄が礼説全体を『周礼』の礼体系に格納しようとするという意図を持っていることを再確認するとともに、異なる経説を並立させる鄭玄の手法が同書にも表れていることを指摘する。

第二章では、『駁五經異義』以上に鄭玄の議論の筋道を詳細に記述している『癸墨守』『箴膏肓』『釈廢疾』を考察する。この三書が、何休への反論を意図したものであって、春秋三伝について鄭玄はどれか一つに固定して与することがないことを確認するとともに、議論となっている中から特に問題を二つ取り上げ、それらについての議論を詳細に検討して、鄭玄が、ある身分の礼制を示すためには礼制の全体像の提示が必要であり、それによって一部の身分の礼を文献で示すことができれば他の身分の礼も推測可能だと考えていたことを指摘する。そして論者は、鄭玄がその礼制の全体像が持つ整合性を確保するために、「辞同事異」（表面上の言葉は同じだが表される内容は異なる）という解釈法を取ることに注目する。そこでは、「辞同事異」の例を検討するとともに、この考え方があるからこそ「経の書法が異なるから褒貶も逆転するとは限らない」という考え方が導かれることを示す。この考察から、鄭玄が目指したのは何だったのかについての従来の学説の中で、春秋の筆法の解明よりも、礼制度の構築を優先して目指したのだという説を補強するとともに、鄭玄の訓詁が文脈に応じたもので、常訓を持たないという先行研究についても、この礼制度の構築優先という態度がもたらしたものであることを指摘する。さらに鄭玄がなぜ『春秋』に注釈を書かなかったかという問題についても、そもそも『春秋』には体系を見いだしがたいという鄭玄の意識がそうさせたのだと指摘する。

第三章では、宗廟・路寝の制度が明堂と同じであるという鄭玄の説が、その後の経学者にどのように引き継がれていったかを考察する。そこでは、梁の皇侃が議論の際に用いた論理が鄭玄の経書解釈法を受け継いでいること、あるいは南北朝時代の学者が単に鄭玄に追随するだけでなく、オリジナリティを出そうとしている様子を描き出す。

第四章では、梁の崔靈恩を扱い、彼の『三礼義宗』が、鄭玄に従いつつも、鄭玄が記述していない、あるいは議論していない内容を補いながら、経文の行文に必ずしもとらわれないで、とにかく当該の礼の具体的な進行についてわかりやすい説明を作り上げていることをまずは指摘する。そして、鄭玄が礼の体系を志向したのに対して、

崔靈恩が具体的な手順を示したことから、実際の儀礼の場で鄭玄説が実践される際には崔靈恩のような仕事が不可欠であったのではという展望も示す。

第五章では、皇侃の『論語義疏』が用いる「同物」という、相手に応じた解答を示す手法（論者は「同物説」と呼ぶ）を、先行研究が示す玄学や仏教の影響を考察しつつ、加えて義疏がもつ問答体の構造と親和性があることを示すとともに、自由な解釈を担保するものだと指摘する。同時に第一章から第三章で論者が考察した鄭玄の經書解釈法と皇侃の同物説との間に共通点を見いだし、それが当時の經学の論理を形作っていたと提起する。

第六章では、北朝から隋の劉炫がどのような環境下で經書のテキストを入手できたのかについて、特に『尚書』と『孝經』のテキストを例に考察する。そこでは、劉炫が『尚書』と『孝經』のそれぞれについて、彼が使ったそのテキストを選択した理由をさぐることにより、劉炫が南朝北朝の学問、さらには鄭玄の学問をどうみていたのかを考察する。

第七章では、「五經正義」の中にみえる「定本」が何を指すのかについて考察する。本論文で扱われる『駁五經異義』以下の多くの書物は、すでに全書は散逸しており、「五經正義」はその逸文の収集先として極めて重要な位置を占める。従って、そこで言及される「定本」の示すテキストを確定するのは、文献学上重要な問題である。そこで論者は、清の劉文淇以来の先行研究を詳細に検討し、その問題点を抽出する。

結論では、鄭玄の思考の型として、多種多様な經説を並立させながら、その上で『周礼』への統合を目指すものであること、また鄭玄の手法の後世への影響として、もともと經書間の矛盾を解消するために使われた手法が、鄭玄の注釈自体の矛盾を解消するために用いられたことを指摘するとともに、その背景には經書解釈の実践の場の権威をめぐる格闘の営みがあったと見る。さらに、鄭玄の經学史上の意義として、經学を仮に博識と集約とに分けた場合、集約を実現するための解釈の方法論を示したものと位置づけている。

緻密で粘り強い行論で説得力を持たせる本論文であるが、いささか不満も残る。先行研究を綿密に再検討した結果は重要な業績であるものの、そこからどう議論を発展させていくのかという今一步の踏み込みがあってもよかったのではという印象が持たれる。ただ、それは論者の今後の研究に委ねられるものであり、本論文の価値をそこなうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2025年2月14日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。